

※「生命環境学部(仮称)」は設置予定・構想中です。名称・内容などは予定につき、変更される場合があります。

神戸女学院大学 2025 年度新設予定“生命環境学部”取材会を実施 建築や情報科学など新たな分野を開設し、

文理の垣根を超え Well Being に貢献する“人間として生きるための学問”を広く学べる学部へ

神戸女学院大学は、2月20日(火)、2025年4月に新設予定の新学部「生命環境学部」に関するメディア向け取材会を実施しました。



左から、西氏、高橋氏、高岡氏、高木氏、笠原氏

Well Being 社会に貢献する女性を育成

2025年4月に新設予定の生命環境学部について、初のマスコミ向け説明の機会となった本取材会には、現在本学で教鞭をとっている高岡素子氏・高橋大輔氏・西靖氏に加え、2023年4月に着任予定の高木俊人氏、さらに新設される建築分野のアドバイザーを務めている京都工芸繊維大学准教授の笠原一人氏をお招きし、新学部の魅力についての説明、および出席者によるトークセッションを実施しました。

冒頭、高岡氏より新学部の教育方針が語られ、「今、時代は、経済活動のみの追求ではなく、Well Being の実現に向けた取り組みが切実に求められている。私どもの教育の目標は、リベラルアーツ教育により、文理を超越えた総合知を学び、キリスト教主義によってノン・シビ「利他の精神」を身に着つけ、大学で得た専門力を用いて広く Well Being 社会に貢献する女性を育成することです」と、女性の活躍を願うコメントがありました。



「文系選択者もチャレンジ出来る理系学部」新設へ

学部説明のセッションでは、高橋氏より、新学部の概要について説明がありました。

新学部では、全ての分野で役立つことができる「データサイエンス」を身につけたうえで、「環境科学」「生命科学」「情報科学」「サイエンスコミュニケーション」の多様な分野を自由に学ぶことができます。また、本学部の受験は、高校で文系、理系どちらを選択していても受験が可能であり、文系科目にて受験された方は、入学後、数学を始めとする理系の基礎となる科目を学習できるカリキュラムが提供されます。

これらの取り組みについて高橋氏は、「生命環境学部は理系学部だが、理系というと“数学が苦手だから”とチャレンジしてこなかった方も多いのでは。しかし、例えば生命環境学部で用いる数学は、受験数学とは全く異なる。入学後、自分の興味のある分野を学ぶために数学に取り組むことは、とても魅力的なことだと思う。高校で文系を選択した方でも、興味と意欲があれば生命環境学部チャレンジし、サイエンスの世界で羽ばたいてほしい」と述べました。

生成系 AI や建築・環境保全・食品など多様な科目を用意

続く各分野の説明では、着任予定の講師陣より、それぞれの専門分野に関する説明がありました。

データサイエンス担当の高木氏からは、昨今の情報化社会や AI 技術について、「現代は例えば生成 AI を用いて文字情報から映像が作れる時代。高度な情報技術について倫理面も含めて深く考え、自分で判断して情報を取捨選択し、正しく利用することが大切」とコメント。新学部で学ぶ学生たちに向けて、情報科学を学ぶことの意義を述べました。

建築を担当する予定の笠原氏は、「建築学は一般的に工学に分類されているが、構造解析など工学に分類される要素以外に、法規、人間心理、人間の生活実態等を学ぶことが必要な文理横断の総合的な学問である。人間の行動や心を深く理解し、人間にとってより良い環境を作ることを目指すリベラルアーツの典型的分野である」とコメント。また、多くの校舎が国の重要文化財にも指定されている神戸女学院のキャンパスで建築学を学ぶことについては、「建物自体を教材にして、“古いものを活かしながら時代に合った要素を付け加え、ヘリテージ建築を現代に生かし続ける”ということを知る、理想的環境である」と新学部で新たに取り入れられる“建築分野”への期待を表明しました。

また、新しい建築分野は、国家資格である 2 級建築士の受験資格を得られるように基礎的な建築学をすべて学べるようなプログラムになっているが、中でも 2 つのテーマに力点を置いている。1 つは建築史や歴史的建築物の保存再生、もう 1 つは木造・木質建築である、と付言がありました。

環境学を担当する高橋氏からは、神戸女学院大学で学ぶ環境学について説明がありまし



た。高橋氏は、「生命多様性を保つことは、Well being に欠かせないことである。800 種もの動植物が生きる岡田山の身近な自然のフィールドで研究ができるのは、とても恵まれたことである」と、キャンパス自体が最良の教材になることについて言及がありました。

高岡氏からは、担当する生命科学について「食品の分析を行うと共に、食品が人間に与える影響を、実験を通して追求している。また、研究の成果を生かし、新たな商品の開発も行っている。身近な『食べ物』を切り口に、人間について深く学べる分野である」と、これまでの研究成果などと絡めながら、生命科学分野の魅力についてコメントがありました。

最後に、コミュニケーション論を担当する西氏は、自身の報道の現場での経験などを交えながら、知識を“伝える”ことの重要性について話しました。西氏は、「生命環境学部で学んで知識を広げた上で、それを社会で役立たせて Well Being を増進するためには、事実を正確に認識することも含めたコミュニケーション能力が欠かせない」と、新学部の目標である Well being に関連付けて、コミュニケーション能力の重要性を強調しました。

リベラルアーツとは“人間”を総合的に学ぶこと

会の最後には「理系を志望する女性へのメッセージ」と題し、トークセッションを実施しました。

昨今の情報社会について高岡氏は、「SNS が普及するなかで、見たものをすぐに信じてしまう人も増えた。論理的思考で情報を正しく見極める力を養うことの重要性を感じている学生も多いのでは」とコメント。これを受けて、データサイエンス、情報科学が専門の高木氏は、「現代は生成系 AI なども出現して情報が多様化、複雑化している。種々雑多な情報の中から価値ある情報を自分で見つけ出すことが求められているので、論理的思考力はより重要であると考えている」と高岡氏に賛同しました。

笠原氏からは、“建築分野”と絡めながら、「工学としての建築学を学ぼうとして物理や数学で受験をしても、本当に建築を学ぶには、“人間”についてありとあらゆることを総合的に学び、考えることが必要であることに気づくはず。そこに文理の垣根は存在しない。新学部における建築の学びは、総合的な知を学ぶことの象徴的な意味を持つのではないか」とコメントがありました。これを受け高岡氏は「リベラルアーツというと抽象的で少々難しく聞こえてしまうが、笠原氏の言う“総合的な知”ひいては“生きていくための人間学”を学ぶことだと捉えていただくと嬉しい」と新学部と新学部での学びの意義について改めて言及しました。



<登壇者プロフィール>

高橋大輔 神戸女学院大学教授

環境・バイオサイエンス学科所属。動物生態学専攻。

生態系の基盤となる生物多様性を保全する為に生態学領域の研究を行う。兵庫県の淡水域や里山をフィールドに魚類や水生昆虫をはじめ様々な動物を対象として、繁殖行動や生活史、生息場所の利用パターン等その生態を明らかにしつつ、地域における生物多様性の現状や具体的な保全策について積極的に発信している。



高木俊人 神戸女学院大学専任講師（予定）

環境・バイオサイエンス学科（2024年4月着任予定）

遺伝情報を用いて野生生物の進化の歴史や集団動態を明らかにする分子生態学的研究を行う。

奈良公園のニホンジカをはじめ野生哺乳類を研究対象として、遺伝解析やゲノム情報からの新規遺伝マーカーの開発なども行い、野生生物の保護管理や保全対策に関する知見を蓄積している。



高岡素子 神戸女学院大学教授

環境・バイオサイエンス学科所属。食の科学専攻。

高岡研究室では発酵食品やアミノ酸などの食品成分の身体の中での働きについて研究。

学生とともに食品会社や化粧品会社との共同開発などを積極的に行っている。



西靖 神戸女学院大学特別客員教授

環境・バイオサイエンス学科所属。コミュニケーション論専攻。

情報番組『ちちんぷいぷい』の総合司会や報道番組『VOICE』のメインキャスターを担当。現在、毎日放送総合編成局アナウンスセンター長。

持続可能性のある社会の実現に関連したコミュニケーションを身につけることを目標とし（改行ツメ）授業ではジャーナリズム論、コミュニケーションについて教鞭をとる。



**笠原一人 建築分野アドバイザー**

1998年に京都工芸繊維大学大学院博士課程を修了し、現在同大学デザイン・建築学系の准教授を務める。また、2010年から2011年までオランダのデルフト工科大学建築学部で客員研究員として活動した経験を持つ。専門分野は近代建築史と建築保存再生論で、近代建築を中心とした歴史研究と歴史的建築物の保存、

活用、改修に関する理念や方法についての研究教育で活躍中。『関西のモダニズム建築』、『建築と都市の保存再生デザイン』など著書多数。現在、神戸女学院大学の建築分野編成に関するアドバイザーを引受けている。

**■神戸女学院大学について**

「教育の伝統 -三つの柱-」の中で「リベラルアーツ教育」を掲げており、学生が専門的な知識を追うだけでなく、専門以外の分野・領域も幅広く学び高い教養と豊かな人間性を身につけつつ、専門性を深化させる教育を目指しています。また、物事を多面的にとらえ異なる視点を得ることも大切にしています。

